

Mr. Bassman (ベースマン列伝) Vol.44

ジャズにおいてベース弾きとは、縁の下の力持ち、水先案内人といったやや日陰の存在。おまけに、ウッドベースなら持ち運びも大変……。だが、黙々とベースをウォーキングさせ、バンドをスイングさせることに魂を注ぐベースマンが、一度化けの皮を剥くとももの凄い名演・名盤が生まれるのだ。このコーナーでは、そんなジャズ・ベースマンの偉業を称えるとともに、ジャズ・ベースの素晴らしさを伝えていきたい。

Bob Cranshaw【ボブ・クランショウ】



Photo by Tom Marcello

(写真は1976年7月6日にニューヨークで行われたジョージ・ウェイン主催の野外コンサート「52nd Street Jazz Fair」に、ボブ・クランショウがズート・シムズ/ジミー・ロウルズ・カルテットのメンバーとして出演した際にトム・マルチェロ氏が撮影したもの)

Profile

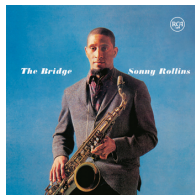
1932年12月10日、米国伊利ノイ州エバンストン生まれ。本名はMelbourne Robert Cranshaw。両親はマダガスカル出身で、父親はジャズ・ドラマー。ハイスクールに入学する前はオーケストラの打楽器を学び、その後、ベースを弾き始める。ブラッドリー大学卒業後に入隊。その後、シカゴでエディ・ハリス等と共演。50年代前半はLAで活動。57年にウォルター・パーキンス等と“MJT+3 (モダン・ジャズ・トゥー・プラス・スリー)”というクインテットを結成。61年にNYに進出。その後、復帰を果たしたソニー・ロリンズのグループに参加。以降50年以上に渡ってソニー・ロリンズ・グループの専属ベーシストとして活躍する他、エラ・フィッツジェラルド、デクスター・ゴードン等、数多くのアーティストとの共演、ブロードウェイのステージワークやスタジオセッション、米国のキッズ向け人気TV番組『セサミストリート』や人気番組『サタデイトナイト・ライブ』でベースを担当する等、多岐に渡って幅広く活動。日本にも90年以降「100 GOLD FINGERS」で毎回来日していた。また、米国、カナダのプロの音楽家のための労働組合“American Federation of Musicians”のメンバーとして多くのミュージシャンのサポートを行い、ミュージシャン達からも慕われ尊敬されている。83歳を迎えた現在も活躍中。

ウッドとエレキ両方で名を馳せるいぶし銀のベースマン

ボブ・クランショウといえば、ソニー・ロリンズ・グループの専属ベーシストとしての印象が強く、どちらかというとエレキベースを弾いている印象を強く持たれがちだが、60年代中頃まではウッドベースでブンブン唸るいぶし銀のプレイを聴かせていた。エレキベースに持ち替えた理由として、一説には腰を悪くしたからという噂も聞かれるが真相は定かではなく、近年もウッドベースを弾いている姿を見かけている。ウッドベースを弾いていた時代で有名なのはソニー・ロリンズの『橋』やリー・モーガンの『ザ・サイドワインダー』、グラント・グリーンズの『アイドル・モーメント』等だろう。これまでリーダー・アルバムを1枚も発表していないことはとても心残りだが、ベーシスト本来の役割を全うし続け、職人的にベースマン魂を守り続けているところはカッコ良くもある。故にソニー・ロリンズもずっと信頼し続けているのかもしれない。

BC's Great Albums

未だにリーダー・アルバムを発表していないことは不思議だが、粹にも感じる。ソニー・ロリンズの作品での好演の他、ウッドベースとエレキベースで多くの名演を残している。

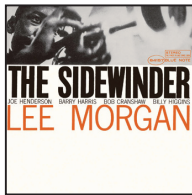


橋

ソニー・ロリンズ

(ソニー・ミュージック : SICP-30248)

ソニー・ロリンズが活動を停止して以来、3年振りに発表された復帰作として語り継がれる名盤。盟友ボブのベースも躍動する。1962年録音。



ザ・サイドワインダー

リー・モーガン

(ユニバーサル・ミュージック : UCCU-99043)

ビルボード・チャートを賑わし、“ジャズ・ロック”ブームを巻き起こしたリー・モーガンの不朽の名盤。ボブのベースの存在感も大きい。1963年録音。



27番目の男 (イン・パースト・オブ・ザ・27th・マン)

ホレス・シルヴァー

(ユニバーサル・ミュージック : TOCJ-50505)

ホレス・シルヴァーのブルーノート27作目のリーダー作。作品全体にポップのエレキベースによるグルーヴ&ビート感が印象深く響く。1972年録音。



プライム・タイム

ヒュー・ローソン・トリオ

(ウルトラ・ヴァイヴ : CDSOL-6912)

ピアノ・トリオ・ファンに人気のヒュー・ローソンのデビュー作。ポップのウッドベースのうねり具合が心地良い。ドラムはベン・ライリー。1977年録音。